

創世記50章19－21節 「和解にあるみこころ」

1A 双方の歩み寄り

1B 加害者の謝罪

2B 被害者の主体的赦し

2A 恐れに対する慰め

1B 罰のともなう恐れ

2B 赦しのことば

1C 裁かれる方

2C 良いことの計らい

3C ことばと行い

3A 和解の使信

1B 神との和解

2B 人との仲直り

本文

創世記 50 章、創世記の最後のページを開いてください。私たちの聖書通読の学びは、前回 48 章まで来ました。午後礼拝で、最後の 2 章、49-50 章を一節ずつ見ていきます。今朝は、ヨセフの兄たちに対する言葉を読みます。19-21 節です。「¹⁹ ヨセフは言った。「恐れることはありません。どうして、私が神の代わりになることができるでしょうか。²⁰ あなたがたは私に悪を謀りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとしてくださいました。それは今日のように、多くの人が生かされるためだったのです。²¹ ですから、もう恐れることはありません。私は、あなたがたも、あなたがたの子どもたちも養いましょう。」このように、ヨセフは彼らを安心させ、優しく語りかけた。」

創世記が、ヨセフが兄たちと和解しているところで終わっているのは、象徴的です。これが、神ご自身がキリストにあって私たちと和解してくださったことを示しているかのようです。創世記は、罪によって神から離れた人が、いかにしてこの方と和解して、神の元に戻るのか？が、テーマです。ですから、ヨセフが自分に罪を犯した兄たちと、このように和解するのは、まさに神の救いのご計画の頂点を示しているとも言えるでしょう。

1A 双方の歩み寄り

和解ということ、実はとても難しいテーマです。重いテーマです。ある韓国の映画に出てくる話について、聞きました。主人公は、息子を殺されます。その後に教会に連れていかれ、赦しのメッセージを聞きます。それで、刑務所に行き、赦すために殺人犯と面会しました。ところが、その殺人犯は、すでに刑務所内で、信仰を持っていました。神から赦されたということで、晴れ晴れした顔で、

面会室に現れたそうです。それで主人公はかえって、気絶してしまう、という内容だそうです。¹

1B 加害者の謝罪

ここで、大きな教訓があります。それは、神から一方的に赦されることが、そのまま和解だということではないのです。自分は神から罪が赦されて自由にされても、自分自身が罪を犯して損害を与えた人に対して、真摯な謝罪と償いが必要だということです。こちらは映画ではなく、本当の話ですが、ある犯罪者がクリスチャンになりました。けれども、そのことを被害者のご家族には話していません。映画のストーリーと逆ですね。なぜか分かりますか？被害者のご家族への謝罪と償いの思いが、自分が罪赦されたということを伝えることで、かえって伝わらなくなるからです。

神の前で罪を告白すれば、罪は赦されています。しかし、罪赦されたからこそ、自分のしたことを悔いて、その悔い改めにふさわしい行いを、罪を犯した相手に示し続けていく必要があります。

2B 被害者の主体的赦し

そして、もう一つ、罪を犯された人、つまり被害者の人たちが、自ら進んで、罪を赦すことです。主体的に、自分の決心で赦すことです。相手に害を与える力、処罰する力を自分が有していたとしても、それでも、自分は赦すのだと決めることです。

教会の中で、大きな過ちが時々、起こります。それは、罪を犯された人がクリスチャンで、相手を赦さなければいけないと思っています。けれども相手は、完全に無頓着です。それで葛藤している人に対して、「赦さなければいけません」とアドバイスをしたりすることです。まず、和解は、加害者の真摯な謝罪と、償いの思いがあって初めて成り立ちます。そして、罪の赦しは、主の前で本人が、主の命令にしたがうからこそ、ただそれだけの理由で、赦します。そこに、他の人が入り込む余地はありません。

2A 恐れに対する慰め

1B 罰のともなう恐れ

それでは、本文を見ていきましょう。父ヤコブが死にました。荘厳な葬儀も終わり、兄たちは恐れしました。ヨセフが自分たちを恨んで、仕返しをするかもしれないと思ったのです。十分、理解できますね。これまでは、父という権威があったから、兄たちと事を起こさないけれども、父がいなくなった今、ヨセフは彼らに対して何でもすることができます。エジプトの権力者ですから、彼らに何をしても良い力を持っています。

それで彼らは、父の遺言を伝えます。それは、ヨセフが兄たちの背きと罪を赦してやりなさい、と兄たちに言い残していたのです。そのことをヨセフに伝え、また彼らは、ひれ伏して「私たちはあな

¹ <https://x.gd/uJ4qJ>

たの奴隷です」と言いました。

それでヨセフの言った言葉は、「**恐れることはありません**」ですね。そして 21 節でも、繰り返して「**恐れることはありません**」と言っています。彼らは罰せられるのではないかと恐れたのです。この恐れ、罪から来る恐れは、人類にとっての呪いと言ってよいでしょう。エバが蛇に惑わされ、アダムが神に罪を犯した後に、彼らには恥が入りました。そして神が園の中を歩いていると、彼らは恐れて、隠れました。ヨハネは、第一の手紙でこう言っています。「Ⅰヨハ 4:18 **愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。恐れには罰が伴い、恐れる者は、愛において全きものとなっていないのです。**」漠然とした恐れは、何か自分はそのままだと罰せられるのではないか？というものから出てきます。そこで、全き愛が必要なのです。恐れを締め出す愛が必要です。

2B 赦しのことば

そこでヨセフは、ありったけの慰めの言葉をかけます。イザヤも預言で、言うならば霊的に満身創痍になっているイスラエルに対して、「慰めよ、慰めよ」と呼びかける神のことばを、語りました。「イザ 40:1-2 **「慰めよ、慰めよ、わたしの民を。——あなたがたの神は仰せられる——2 エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その苦役は終わり、その咎は償われている、と。そのすべての罪に代えて、二倍のものを【主】の手から受けている、と。」**自分たちの罪によって、バビロンに捕え移されたユダヤ人たちに対して、二倍もの赦しを与えて慰めると言われます。こういった優しい語りかけを、ヨセフが行います。

1C 裁かれる方

一つは、「**どうして、私が神の代わりになることができるでしょうか**」であります。確かにヨセフは、今、彼らを殺すことも、生かすこともできます。権力者です。しかし、ヨセフはへりくだっていました。さばくのは、神だということです。人を生かし、殺す権威を持っているのは、神のみだということです。申命記に「32:35 **復讐と報復はわたしのもの**」とあります。神のみが行うことで、立ち入ってはいけないということです。そのことに基づいて、パウロが、ロマ書で勧めています。「12:19 **愛する者たち、自分で復讐してはいけません。神の怒りにゆだねなさい。**」

イエスが、「さばいてはいけません」と、山上の説教で言われましたが、それが神の領域だからです。立ち入れば、当然、自分自身が身に災いを被ります。だから、「さばかれるものは、さばかれる」と主が言われました。「マタ 7:1-2 **さばいてはいけません。自分がさばかれないためです。2 あなたがたは、自分がさばく、そのさばきでさばかれ、自分が量るその秤で量り与えられるのです。**」

さばかないのは、判断しないことではありません。さばかないのは、悪を悪と言わないことではありません。判断すること自体が、悪であるとする、まるでイエスの言われたことの真逆の解釈をする人がいますが、とんでもないことです。神しか復讐できないことを知って、神を恐れて、自分の

手で仕返ししないのです。

2C 良いことの計らい

そして、次にヨセフは、「**あなたがたは私に悪を謀りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとしてくださいました。**」と言っています。これは、すでに兄弟たちに、ヨセフが自分のことを明かした時に、話していましたね。「45:5 **私をここに売ったことで、今、心を痛めたり自分を責めたりしないでください。神はあなたがたより先に私を遣わし、いのちを救うようにしてくださいました。**」イエスが十字架に付けられたのも、神のご計画があったことを見ましたね。主を十字架につけたのは、悪なのです。人殺しならず、神殺しをしたのですから、大罪です。けれども、神はそれを、全世界の罪の供え物にするために、用いられました。このことによって、すべての人がキリストによって生きようとするためでした。

キリスト者にある罪の赦し、和解には、そのような神の計らい、すべてのことを良きに計らうというところにある、心の大らかさがあります。他の人間の哲学や宗教においては、因果応報というか、すべて人のしたことが、そのまま報いが来るという考えに基づいています。悪いことが起これば、それが何のせいなのだ？という原因追及をします。しかし、私たちには、前に向かって進む自由が与えられます。主が何かをしているかもしれないという、思いが与えられるからです。いつまでも、自分の理解できないところに沈着する必要はないのです。主が何かをしておられるのだから、今、主が言われていることを行っていこうという自由が与えられます。

そういったご計画の中で、たとえ悪であっても、そこに神のご計画があることを見つめ、それで人の罪に対する責めを過ぎ去らせる思いが、与えられるのです。

3C ことばと行い

そして 21 節、「**ですから、もう恐れることはありません。私は、あなたがたも、あなたがたの子どもたちも養いましょう**」と言っています。そうです、ヨセフにとって父の家に、父がいなくなったのだから、彼らを養う義務などありません。けれども、ヨセフは兄たちを愛していました。そして、兄たちが罪から来る恐れに対して、慰めたいと願って、それで義務ではないことまで行おうと言ったのです。その恵みの中で、兄たちは次第に、心が癒されていくでしょう。初めは、まだ自分自身を赦せない思いがあると思います。けれども、恵みを受けていき、それで心の責めがなくなっていくのです。

こうやって、和解は、罪を赦すことと、さらに赦していることを言葉と行いによって示していくことによって成り立っています。

3A 和解の使信

こうやってヨセフの言葉を見ましたが、聖書には数多く、和解をすることの使信、メッセージがあり

ます。

1B 神との和解

神との和解です。神が世にキリストを遣わしたのは、私たちが神と和解するため、また万物を神と和解させるためです。「コロ 1:22 今は、神が御子の肉のからだにおいて、その死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。あなたがたを聖なる者、傷のない者、責められるところのない者として御前に立たせるためです。」私たちは、神に罪を犯して、それで敵対してしまいました。神の正しさにしたがえば、私たちは制裁を受けて、滅んでもおかしくありません。しかし、神はキリストに、その罪の責めを置かれました。それによって、神ご自身が一歩進んで、私たちの罪を赦し、また一つにすることを願われています。

そして、アダムが罪を犯したことで、地がのろわれたものとなりました。その地また天が、神と和解、すなわち調和して、神の願われている通りに回復する必要があります。「コロ 1:20 その十字架の血によって平和をもたらし、御子によって、御子のために万物を和解させること、すなわち、地にあるものも天にあるものも、御子によって和解させることを良しとしてくださったからです。」御子が行われたのは、ただ私たちの罪を赦すだけでなく、罪によってもたらされた、地上のあらゆるのろいを取り除き、ご自分のみこころにかなった新しい天、新しい地にするためです。

そして大事なのは、この和解を受け入れることです。神はキリストにあって和解してくださったのに、それを受けなければ平和は来ません。パウロは、こう言っています。「Ⅱコリ 5:20b 私たちはキリストに代わって願います。神と和解させていただきなさい。」神が怒っていて、それで私たちが怒りを宥めるために悔い改めて、それで仲直りするものではありません。神はすでに和解されているのです。問題は、心を頑なにしている私たちの側、人間の側なのです。受け入れるのです。

2B 人との仲直り

それで、初めて私たちは人と人の和解ができます。何か特別な敵対関係ではないですが、隔ての壁があったのが、ユダヤ人と異邦人です。律法によってユダヤ人はいろいろな規定があり、それで異邦人と離れて生きていました。食物規定などは、その典型ですね。しかし、主は、キリストの十字架によって、二者を一つとされます。「エペ 2:16 二つのものを一つのからだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。」

私たちは、一歩、踏み出す勇気が必要です。イエスが言われましたね。「マタ 5:25 あなたを訴える人とは、一緒に行く途中で早く和解しなさい。そうでないと、訴える人はあなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡し、あなたは牢に投げ込まれることになります。」和解の機会がある時に、和解しなさいという勧めです。敵意はどんどん、発展します。ふきれ上がります。和解の機会が与えられたら、時を待たず、その人の前に行くのです。